



NPO 法人 大磯ガイド協会

照 ヶ 崎

第57号
令和6年5月20日

〒255-0003 神奈川県中郡大磯町大磯 1933-1

TEL 0463-73-8590

ホームページ

<https://www.oisoguide.com>



三重苦だった天保7年の大磯

佐竹 明雄

今年は、能登の大地震や羽田空港の事故など、多難が予想される年明けとなった。被災された方々や亡くなられた方にお見舞いとお悔やみを申し上げます。

さて、明治維新の31年前の天保7年(1836)は大磯にとって今年と同様に受難の年であった。「高潮」「打ち毀し」そして「大火」である。7月29日夜の「打ち毀し」は天保の飢饉により米価の高騰に耐え切れなくなった人々が、米価の値下げ交渉過程で、偶発的に発生したもので、宿民563人が、北下町の豪商「川崎屋」をはじめ6軒の商家を襲い、居宅、土蔵などを破壊し、大量の米穀類を往来などにまき散らした。このような暴動は大磯だけではなく全国的に頻発していた背景がある。この年は稀にみる凶作で、そのうえ7月18日には暴風雨による高潮のため南下町の家屋54軒が大破、更に不漁が続き住民は極端に困窮していた事情があった。被害者の川崎屋右衛門は妻子を亡くし、帰るべき家も後述する大火のため焼失し、一時は半狂乱となって世間を恨んだが、親戚や知人らの必死の説得により、気を取り直して尊徳作法を実践し大磯宿の再建に尽力した。



供養塔(東光院境内)

打ち毀しから約1ヶ月後の9月5日夜半、北下町の大横丁、半七方から出火、折からの強風に延焼を重ね、翌日午前まで燃え続け、大磯宿の家数666軒の75%にあたる501軒が焼失し、焼死者80余人を数えた。特に南下町の福寿院境内(現在の東光院西隣)に避難した老若男女40余人は無残にも全員焼死した。供養塔が東光院境内に建立されている。また大磯宿に宿泊していた松平周防守康爵一行も罹災し、荷の大半を失った。周防守は石州浜田藩(島根県浜田市)から陸奥棚倉藩(福島県棚倉町)へ国替えの道中であつた。大名が宿場で罹災したことは前代未聞であつた。「高潮」「打ち毀し」「大火」と続いた三重苦は、大磯宿の歴史のなかでも特筆の出来事であり、天保7年は大磯にとって忘れられない悲しい年となった。

そののち、明治維新による宿場の廃止により、大磯は更に疲弊衰退したが、私たちの先人は逆境をバネに、この地で時代を先取りした自由民権運動を展開し、海水浴場を拓いた。これを契機に日本有数の別荘地として発展を続けさせて来たことは周知の事実である。私達はいま、大磯の先達の不屈の精神を学びたい。

——— 今後の活動予定 ———

No.	月日	活動内容
1	6月30日(日)	会員研修(わかりやすい話し方講習) アナウンサーによる指導
2	7月	会員研修(危機管理・救命講習) 大磯消防署指導員

活 動 報 告 令和6年2月～令和6年5月

——企画ガイド「大磯の梅の名所を訪ねる」——

2月8日(木)10日(土) お客様23名 ガイド6名

大磯の梅の開花を待ち望み、お客様を梅の名所へご案内した。古刹地福寺の門をくぐると白梅「白加賀」の古木が境内に拡がり、ここに眠る藤村の墓も覆いつくす。更に「唐梅」「緋梅」も競うように咲き誇り、入り口近くの河津桜が色鮮やかに花をつける。国道1号線を横断し町役場脇より鎌倉古道を進むと、翠溪荘門前の紅白の梅もほころび、春の気配を漂わせていた。



明治記念大磯邸園では、白の「南高梅」「白加賀」がほころぶ中に「鹿児島紅」「難波紅」の紅の濃淡が配置され、庭石や灯籠と共に心を落ち着かせてくれる。その後バス移動で3か所目の名所へ。旧吉田邸は約80本の梅が見ごろを迎えており(写真・兜門)、梅の品種も多くお客様と共に配置図を見ながら鑑賞した。心字池を囲む辺りには水仙の花も香り、メジロやヤマガラ等野鳥の姿

も見られ、来訪者を楽しませてくれた。最後に邸宅を見上げ、主が最も好んだという枝垂れ梅「淡路枝垂れ」をご案内し、今回のガイドを無事終えることができた。

(沼野 美智子)

——企画ガイド「東海道大磯宿に行く」——

2月24日(土) お客様33名 ガイド7名

さわやかな晴天のもと、大磯宿を中心に西から東へと曾我物語ゆかりの史跡を巡り、江戸時代へタイムトリップするコースを7名のガイドが案内した。東海道松並木では約四百年前の街道の雰囲気味わい、東海道中膝栗毛にも登場する俳諧道場の嶋立庵(写真)では、西行と虎御前の像を拝観した。延台寺では当会杉本会長の解説のもと特別開帳された虎御石を見学する貴重な機会を得た。さらに歩を進め虎御前が属した遊郭があったとされる化粧坂を経て、東照権現(徳川家康)が祀られ大名行列も下馬したという高来神社(旧高麗寺)に到着した。お客様には大磯に残る江戸時代の名所をゆったり味わっていただいた。(寺田 啓治)



——企画ガイド「明治の群像・財閥を築いた実業家たち」——

3月9日(土) お客様55名 ガイド10名



明治時代、大磯に別荘を持った財閥の当主たちの繁栄とその生き様に想いを馳せ、その面影をめぐるツアーである。初春の晴天の下、県立城山公園の山頂では、三井惣領家当主・三井高棟が「城山荘」から見たであろう雪を被った富士山や相模湾の眺望を楽しみ、旧古河別邸では、古河市兵衛・潤吉・虎之助が歩いた広大な庭園(写真・あずまや)を散策し、浅野総一郎、安田善次郎と引き継がれた「王城山」の麓、「旧安田善次郎邸」では、特別に開扉された庭園に点在する安田靫彦画伯設計の優美な建築物群を鑑賞した。

最後に大磯駅前の「愛宕山」では、三菱財閥の岩崎弥之助、久弥が過ごした別荘跡に、久弥の長女・沢田美喜が設立した「エリザベス・サンダース・ホーム」を門前で紹介した。

今回初めての試みで、郷土資料館研修室にて「大磯の財閥別荘の時代背景」や「訪問先の概要」の事前説明を行ったことで、理解が深まり、担当した5人のお客様には満足していただけたと思う。(岡田 秀昭)

——企画ガイド「石神台 春のお庭めぐり」——

4月19日(金)20日(土) お客様44名 ガイド11名



今回で18回目を迎える大磯オープンガーデン。春の花々に溢れるこだわりの庭の石神台を案内した。「石神台」はガーデニング歴40年以上の住人の方の影響で花を育てる人が増え、「オープンガーデン」の原形となる催しを地区内で開催、それが大磯町全体を巻き込んで、現在の「大磯オープンガーデン」のきっかけとなった地ともいわれている。

平日にも関わらず大勢の方々が申し込んでくださり、3つのグループに分かれて案内した。それぞれの庭のオーナー達が大事にしているコンセプトがあり、その説明を聞きながらガイドデビューまもない私もわくわくさせられた。ミモザの花が満開の庭。ゼラニウムと薔薇とクレマチスのイングリッシュガーデン。西側が本格的な日本庭園、東側が洋風庭園。日当たりのよい斜面一面にルピナスを咲かせた庭(写真)。樹木と石と灯籠を配した庭。暮らしに役立つ果樹やハーブをおしゃれに組み合わせた庭など。

庭の花々をほとんど知らなかったが、前もって協会の資料を勉強し、当日は先輩ガイドのフォローもあり担当をした7名のお客様には喜んでもらえたと思う。「帰りのバスの時刻を考慮した時間配分でご案内ができていたらもっとよかったのに…」と反省の念が残る。

(井ノ口 昇)

——キッズガーデンウォーク「不動川沿いの野鳥・野草の観察とお庭めぐり」——

4月21日(日) お客様17名 ガイド6名

自然豊かな国府地区での春のウォーキングツアーは、子供達を中心として、不動川沿いで、普段は気に留めない野鳥や野草、魚をクイズ形式で楽しく観察しながら散策しました。川にはマゴイが群れをなして泳ぎ、コサギやカルガモ、マガモもいました。前のグループは、カワセミも観察できたようですが、私たちのグループは、川面を飛んでいく姿しか見られませんでした。土手の脇のお花畑では、セイヨウタンポポとカントウタンポポの違いを観察し、イチリンソウやキランソウの群落も見つけました。



オープンガーデンの見学では、それぞれ個性的なテーマを持つ花いっぱいの庭を見学し、フィールドガーデン「はなぶた」さんから、子供たちへ虫よけにもなるオニヤンマのブローチのサプライズプレゼントがありました。さらに権現山横穴古墳群の一つ、竹林の洞穴を探検し、ゴールでは子供たちが観察した野鳥や野草のクイズに、パパやママから花丸をもらい、子供から大人まで、楽しく参加できたイベントになりました。

(平川 香林)

——大磯西行祭——

日本三大俳諧道場のひとつ「鳴立庵」において、3月31日(日)に「第67回大磯西行祭」が催行されガイド協会を代表して出席した。「願わくは花の下にて春死なんその如月の望月のころ」の希望通り春(現在の3月下旬)に入滅した西行法師。その遺徳を偲び、俳道、歌道の発展を期す催しで、本井英第二十三世庵主、池田町長他が参列された。献詠の俳句、短歌には小学生から一般まで全国から 1,337点の応募があったとのことで入選作が紹介された。大磯周辺を吟遊して詠んだと言われている「心なき身にもあはれは知られけり鳴立沢の秋の夕暮れ」。円位堂の西行座像前に献花し、私自身が若い頃から抱いてきた漂泊の歌人への憧れとともに、草庵を結んだ崇雪、俳諧道場として再興した大淀三千風、さらに芭蕉や白洲正子など西行に魅せられた方々への想いも新たにしたいひと時であった。

(橋本 久)

特集「室町・戦国時代の大磯近辺の戦い」Ⅱ 武山 加根子

Ⅱ 永享の乱

高麗山が戦いの舞台に登場するのは、「永享の乱」である。永享10年(1438)10月から翌年にかけて戦われた足利家同族間の争いで、関東に戦乱を呼び込む契機となった。足利家の創始者である足利尊氏は、関東10か国を4男の足利基氏に支配させ、「鎌倉府」を「関東公方」とした。基氏は関東公方の補佐役として、越後守護・上杉憲顕(のりあき)を執事に任命し、「関東管領」とした。これらの役職は世襲だった。この広大な領地と権限を巡って、関東公方、関東管領及び足利将軍が交錯した幾つかの争いが、「永享の乱」の伏線となる。



足利政権盛んな応永30年(1423)、第4代将軍・足利義持(よしもち)は、第5代の将軍職を嫡子の足利義量(よしかず)に譲ったが、義量は19歳で急死。間もなく義持も後継を決めずに逝去。やむなく重臣は義持の弟4人の中から神饌により将軍を選び、天台座主であった義円を還俗させ義教(よしのり)と改め、第6代将軍とした。

当時の関東公方・足利持氏(足利基氏の曾孫)は、自分が将軍に迎えられることを期待していた。そのため、第6代将軍が足利義教に決まるとことごとく反発した。持氏の嫡子「賢王丸」元服の際に、関東管領・上杉憲実(のりさね)は、慣例により将軍・義教より一字を賜うよう進言したが、無視し「義久」と命名し元服を強行した。さらに持氏の将軍誹謗を諷めるも聞き入れられず、逆に追討軍を差し向けられた。身の危険を察知した上杉憲実は領国の上野の平井城に退去、そして幕府に援軍を求めた。これが「永享の乱」の始まりである。

足利持氏は武蔵府中の高安寺(府中市)に布陣。将軍・足利義教は、京都から上杉持房(第4代関東管領、上杉禅秀の次男)、駿河守護・今川範忠らに持氏追討を命じた。上杉勢と今川勢は、箱根・足柄から相模に入り、高麗寺山に布陣した。一方、足利持氏は鎌倉防衛のため、相模川で幕府軍を食い止めるべく、木戸持季(もちすえ)(持氏の側近)を平塚八幡林に布陣させた。上杉憲実は分倍河原(府中市)に布陣し、持氏側に圧力をかけた。

上杉勢と今川勢が陣を敷いた場所として『今川記』は「高麗寺山」とし、『永享記』は「相州高麗寺」としている。鎌倉を攻撃するための陣として利用されたものであり、籠城を目的としていないことから、兵力の大半は山麓に布陣して、山頂部を敵状把握の眺望所として活かしたものと考えられる。

今川範忠、上杉持房、上杉憲実の三方から攻め込まれた持氏は、海老名まで退き鎌倉に落ち延びた。留守を預かるはずだった三浦時高が離反、そのため憲実の家老・長尾景仲を頼った。そして幕府への恭順を誓い称名寺で剃髪、謹慎した。憲実是将軍に対して持氏の助命と義久(持氏の嫡男)の鎌倉公方の就任を嘆願した。しかし将軍は許さず、憲実に殺害を命じた。持氏は永安寺で自刃、義久も報国寺で自刃した。血で血を洗う同族の争いの狭間で、関東管領・上杉憲実の苦悩はいかばかりであったろうか。次は「結城合戦」を採り上げる。(つづく)

【編集後記】 5月18日 NPO 法人大磯ガイド協会第12回通常総会が、池田町長、大塚観光協会副会長、芦川商工会会長を来賓に迎え、福祉センターで開催されました。本年度は役員非改選年度なので、役員は全員留任、事業・決算報告、事業計画・予算案、定款改正などが決議され、盛会裡に終了しました。コロナもほぼ収束し、企画ガイドなどのお客が増えつつあります。会員一同、心を込めてお迎えしたいと思います。本号は巻頭に天保7年の大磯の受難を記し、特集の「室町・戦国時代の大磯近辺の戦い」も2回目を迎えました。企画ガイド報告からは活動の活況を読み取っていただければ幸いです。明治記念大磯邸園の工事進捗も順調で、開園後の大磯観光の活性化を大いに期待し、私たちもその一助になるよう頑張りたいと思っています。(渥美 和久)